中古説話文学研究序説

高橋　貢著

著者略歴

高橋　貢（たかはし みつぐ）

昭和7年11月。東京都目黒区上目黒に生まれる。
昭和37年3月。早稲田大学大学院博士課程（日本文学）修了。
昭和48年5月。文学博士号授与される。
職歴。早稲田実業学校教諭，早稲田大学文学部講師を経て，現在梅光女学院大学助教授。
主要著書。東洋文庫「日本霊異記」（平凡社，共著）。日本文学研究資料叢書「今昔物語集」「説話文学」（有精堂，共編）。

中古説話文学研究序説

昭和四十九年十一月十日初版印刷
昭和四十九年十一月十五日初版発行

定価　六、八〇〇円

著者　高橋　貢
発行者　及川　篤二
印刷所　暁印刷株式会社

101 東京都千代田区猿楽町二―八―一三
㈱桜楓社
電話　(03)二九一―五六六一
振替　東京　一八〇二〇

3091-741168-0723
Printed in Japan

中古説話文学研究序説

目　次

序　章　説話の基本的な問題……七
一　説話と説話文学……七
二　昔物語・世の物語・雑事と説話……一四
三　事実と説話……二三
四　説話と記録……三〇
第一章　日本霊異記から今昔物語集へ……四〇
一　日本霊異記の説話伝承をめぐって……四〇
二　日本霊異記と今昔物語集をつなぐ諸作品……五七
—漢詩文作者によって書かれた諸作品をめぐって—
第二章　源信僧都と説話文学—説話集成立の一背景—……九〇
一　慶滋保胤と源為憲……九〇
二　源信僧都とその周辺の人々の説話……九八
—本朝法華験記と今昔物語集を中心として—
三　地蔵菩薩霊験記（今昔物語集巻十七を含む）成立の一背景……一一五
第三章　説話の伝承についての問題……一三八
一　説話の二系列について……一三八
—打聞集、今昔物語集、古本説話集、宇治拾遺物語の伝承関係—
二　打聞集の説話伝承の問題……一四三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三　古本説話集と世継物語……一五八
四　七大寺巡礼私記と今昔物語集……一六九
第四章　説話の伝承者……一八四
一　説経師と説話　付、金沢文庫蔵「言泉集」と説話……一八四
二　説話の伝承者―貴族の場合―……二〇五
第五章　今昔物語集の翻訳態度をめぐって―三宝感応要略録との比較から―……二三一
第六章　今昔物語集成立の背景をさぐる……二四一
第七章　今昔物語集の説話をめぐって……二六三
一　羅睺羅の話と玄奘三蔵が鬼難に逢う話―巻三第三十と巻六第六―……二六三
二　源信僧都の母の話―巻十五第三十九―……二七三
三　藤原義孝往生の話―巻十五第四十二と巻二十四第三十九―……三二〇
四　橘季通と実因僧都の話―巻二十三第十六と第十九―……三四三
五　今昔物語集の源氏と平氏……三五五
付録　今昔物語集における天台宗関係系図……三七五
あとがき……三九三
索引……三九九

中古説話文学研究序説

序　章　説話の基本的な問題

一　説話と説話文学

(1) 説話の概念

時に舎人有りき。姓は稗田、名は阿礼、年は是れ廿八。人と為り聡明にして、目に度れば口に誦み、耳に払るれば心に勒しき。即ち、阿礼に勅語して帝皇日継及び先代旧辞を誦み習はしめたまひき。(「古事記」上巻序。よみ下しは日本古典文学大系による)

畿内七道諸国郡郷名著二好字一。其郡内所レ生。銀銅彩色草木禽獣魚虫等物。具録二色目一。及土地沃瘠。山川原野名号所由。又古老相伝旧聞異事。載二于史籍一言上。」(続日本紀　和銅六年五月甲子条)

粤ニ起ちて自ら矚るに、忍び寝ムコト得不。居て心に思ふに、默然ルコト能は不るが故に、聊か側ニ聞くことを注し、号けて日本国現報善悪霊異記と曰ひ、上中下の三巻を作して季の葉に流フ。(中略)但し口説すること詳かなら不るを以て、忘れ遺すこと多くあらむ。(日本国現報善悪霊異記　上巻の序。よみ下しは日本古典文学大系による)

世に、宇治大納言物語といふ物あり。此大納言は、隆国といふ人なり。(中略)もとどりをゆひわげて、を

かしげなる姿にて、莚をいたにしきて、すゞみゐはべりて、大なる打輪をもてあふがせなどして、往来の者、上下をいはず、よびあつめ、昔物語をさせて、我は内にそひふして、かたるにしたがひて、おほきなるさうしに書かれけり。（宇治拾遺物語　序）

これ、そこはかとなきすゞろごとなれども、いにしへより、よきこともあしきことも、しるしをき侍らずは、たれかふるきをしたふなさけをのこし侍べき。これによりて、或は家々の記録をうかゞひ、或は処々の勝絶をたづね、しかのみならず、たまぼこのみちゆきずりのかたらひ、あまさかるひなのてぶりのならひにつけて、たゞにきゝつてにきく事をもしるせれば、さだめてうける事も、又たしかなる事もまじり侍らんかし。（古今著聞集跋文）

文字が流布し、使用する以前は、国の起源や家の系譜、個人の事蹟、事件、土地や人々にまつわる話は、古老や人々によって語り、伝えられていた。この伝承の性格は神話、説話を収録した諸作品はもとよりのこと、作り物語、軍記物語、あるいは江戸時代の諸作品にも見られる。[注1]「説話」という用語は明治以後の国文、歴史、民俗、美術、仏教等各学界で使用しているが、その意味、内容はさかのぼると右に引用した序、跋文につながっている。

今日使用している「説話」には種々雑多な話が含まれる。[注2]そこで厳密な意味での概念規定はできにくい。今日までの先学の諸論[注3]を受けて説話についての一応の定義をしておくと、「説話とは『はなし』という意味であるが、日常会話的なはなしではなく、口承、あるいは書承によって伝えられるはなしである。」

はなしはすべてが伝えられるとは限らないが、伝えられる可能性はある。即ち日本霊異記、今昔物語集等の特定の説話集に一度しか見られない話もあるし、また冥報記等先行の説話集にある話を翻案したような話もあるが、それらの話も伝えられる可能性がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(2) 説話の文学性

国文学として残されている作品の場合、説話は大別して一、説話集としてまとめて収録されている場合、二、他のジャンルの作品の中にとられている場合（例えば歴史物語、軍記物語）、三、作り物語の作者、歌人によって説話が解体されて物語、歌の中に消化、吸収されている場合の三通りの場合が考えられる。説話の文学性を論じる場合、三は一応除外して考える必要がある。一、二を対象にして説話の文学性を論じる場合、その文学性をどこに見出すかは研究者の立場、見方によって相違する。これまで説話の文学性について言及した論文は多いが、[注4] これら先学の研究者の論文によっても日本国現報善悪霊異記（以下日本霊異記と略称を用いる）、今昔物語集、字治拾遺物語等の説話集には、今日の目の肥えた読者の興味や関心をひくに足る説話がとり上げられている。ただしそれらの話が全部興味をひく話というわけにはいかない。むしろ大部分の話は無味乾燥の話である。それらの中に文学的価値のある話が混ざっている。このことを日本霊異記の話を例に上げて述べてみよう。日本霊異記巻上第一「捉レ電縁」は左のような内容の話である。

雄略天皇が大極殿で皇后と寝て婚合していた時、小子部栖軽が気づかずに入って来た。天皇は恥じて止めた。その時雷が鳴った。天皇は雷を呼んで来るよう命じると、栖軽は軽の諸越まで雷を追いかけて捕えた。その時雷が光ったので、天皇は恐れてもとの所に還させた。栖軽が死んでのち天皇は「雷を捕えた栖軽の墓」という碑文の柱を立てさせた。雷がにくんで柱に落ちると、柱の裂け目にはさまれて動けなくなった。

この話の類話は以下の通り日本書紀　雄略天皇七年（四六三）秋七月条にある。――「天皇詔二少子部連螺蠃一曰、朕欲レ見二三諸岳神之形一。汝膂力過レ人。自行捉来。螺蠃答曰、試往捉之。乃登二三諸岳一、捉二取大蛇一、奉レ示二天

皇一。々々不二斎戒一。其雷虺々、目精赫々。天皇畏、蔽目不レ見、却二入殿中一。使レ放二於岳一。仍改賜レ名為レ雷。」

日本書紀の右の記事は、日本古典文学大系「日本書紀」頭注で「以下は、霊異記、上第一にもやや異なる所伝が見えるが、それは飛鳥の雷岡の地名説話で、本条が（中略）各地の土着の神神に対する天皇の権威を示す話とされているのと異質である。」と指摘しているように、神に対する天皇の権威を示す話になっている。一方日本霊異記の話の場合は、益田勝実氏（「説話文学と絵巻」九〇頁）が指摘されているように、天皇の婚合や、照れかくしに栖軽に命じて雷を捕えさせるという心理を記している。天皇が人間としてあからさまにむき出されている。

日本霊異記からもう一話例を上げる。巻上第三十一「慇懃帰二信観音一福分以現得二大福徳一縁」は左のような内容の話である。

御手代東人は吉野山で三年修行したのち観音の名号をとなえて、「どうか銅銭万貫、白米万石、好い女性を大勢施して下さい。」と祈った。その時、従三位粟田朝臣の娘が病気になった。朝臣は東人を呼んで咒文をとなえさせると、娘の病気は直った。娘は東人に恋し、二人は交わった。家族は東人を閉じこめたが、娘は東人を恋いしたって止まなかったので、二人を結婚させた。東人は五位を賜わり、財産を得た。数年たって女が死ぬ時、妹に「あなたの娘を東人の妻にして下さい。」と言った。東人は妹の娘を妻にし、大福徳を得た。

この話は、主人公が観音に虫のよい願いをするが、その願いがことごとく成就する。このような虫のよい願いがすべて成就するところにかえってユーモアが感じられる。始め粟田朝臣の娘が病気の時、東人は咒文をとなえて直した。娘が東人の妻になって死ぬ時、東人が咒文をとなえたとも直したとも書いていない。このような矛盾、省略は他の説話にも見られる。この話を語り、書きとめた人にとっては観音の霊験功徳が聴者、読者に伝わりさえすればよかったのであり、そのためには東人の欲望が全部達せられるように話の筋が進めばよい。余計な筋は省略、簡

略化されている。このような素朴な叙述の中に、かえって古代の人々の率直な願いや欲望が出ている。

説話文学の特色の一つは、様々の人間の様々な心理、愛欲、愛情が描かれていることであり、二つは叙述の方法が物語と比べると簡潔、素朴であり、また具体的で会話が多く使われていることである。―このことについて五十嵐力氏（「平安朝文学史」上巻一八七頁）は、日本霊異記の対話が多く、「誰れ曰はく何」「誰れ曰はく何」と切りつつ進む仕方を、段段叙述と名づけ、竹取物語と類似していると指摘する。

日本霊異記巻上第二「狐為レ妻令レ生レ子縁」は、狐が女に化して男と結婚し、その子孫から強力の人が出た話である。この話の始めに、男が妻とすべき女を求めて馬に乗って行くと広野で一人の女に会った。その時二人は次のように問答して結婚する。

（男）言はく『何に行く稚嬢ぞ』といふ。嬢答ふらく『能き縁を覓め将として行く女なり』といふ。壮も亦語りて言はく『我が妻と成らむや』といふ。女『聴さむ』と答へ言ひて、即ち家に将て交通ぎ相住む。

物語、小説の場合ならば結婚するまでの経過や二人の愛情の変化等をこまかく書くであろうが、これらの描写や叙述を省略し、対話を主体として簡潔、スピーディーに話を展開する。

第三の特色は、様々の職業、階級に属する人、あるいは男女老幼が各話の主人公として登場するし、また動植物、鬼、霊等の異類も活躍する。また話の種類（発心、出家、往生、霊験、滑稽、怪異、合戦、芸能等）、地理的範囲、話の筋等の点で多様の話をとり上げる。このような様々の話をのせている所に説話集の一特色がある。

第四の特色は、話によって各時代の社会事情や人々の関心を反映し、盛りこんでいる場合がある。

日本霊異記巻中第三「悪逆子愛レ妻将レ殺レ母謀現報被二悪死一縁」は、武蔵国多麻郡の吉志火麻呂が防人にとられた。ところが妻との別れにたえらず、母を殺して喪に服し、兵役を免かれようとした。すると突然大地が裂け、火

麻呂は裂け目に落ちて死んだ話である。この話には、防人として九州に行かなければならない東国の人々が、父母や妻子との別れをいとい、歎いた奈良時代の人々の様子や社会事情の一面を反映している。

日本霊異記巻上第四「聖徳皇太子示二異表一縁」は、聖徳太子に関する話である。この中に太子が片岡村で病気で臥していた乞食に会った。太子は衣をぬいで乞食に覆った。乞食が死ぬと太子は墓を作って葬った。のちに使をつかわすと、墓の入口に「鰐の富の小川の絶えばこそわが大君の御名忘られめ」という歌が立てかけてあった、という話を記している。この話は太子の通力を示す話であるが、事実あった話かというとそうではなくて、むしろ太子に対する信仰、関心がこのような話を作り出したと見た方がよい。ただし事実ではないとしても全くの仮空の話でもない。万葉集巻三に左の通り詞書を付した太子の歌がある。

上宮聖徳皇子、竹原井に出遊しし時、竜田山の死れる人を見て悲傷びて作りましし御歌一首

家にあらば妹が手まかむ草枕旅に臥せるこの旅人あはれ　（日本古典文学大系による）

万葉集には他にも山や道端の死人を見てよんだ歌がある。

柿本朝臣人麿、香具山の屍を見て、悲慟びて作る歌一首

草枕旅の宿に誰が夫か国忘れたる家待たまくに　（巻三）

足柄の坂を過ぎて死れる人を見て作る歌一首

（長歌一首　省略）（巻九）

これらの例から、日本霊異記の太子の話は、元来は万葉集所収の詞書と歌のように太子が死人を見て悲しんで歌をよんだと見る方が自然である。それが次第に日本霊異記所収話のように変えられて来たのであろう。視点をかえて、聖徳太子説話にどのような時代背景が反映しているかというと、太子に対する人々の信仰、関心が強かったと

共に、山や道端に死人が多かったことがわかる。

第五の特色として表現上の技巧について述べると、簡単な叙述の中にも誇張や対照が使われており、会話には擬声語、俗語が用いられている。一方王朝的な話には対句や調子のよい表現が使われている等、話によって技巧や表現が使いわけられている。

ここでは例として日本霊異記の話をとり上げたが、これらの特色は今昔物語集、宇治拾遺物語になるとさらに生彩を放つようになる。

注1　作り物語等に伝承性を残していることは、岡一男氏（有精堂刊「古典の再評価」総説33～35頁）がくわしく述べておられる。

2　国東文麿氏（「説話と説話文学」解釈と鑑賞　昭和四十年二月）は、説話には「書承あるいは口承の、伝説・昔話・世間話・有職故実の記録・貴人高僧の逸話・伝記のようなものから、詩話・歌話・短篇小説に類するもの」等の種々雑多な話が含まれることを指摘されている。

3　坂井衡平氏（「今昔物語集の新研究」第三章、今昔物語集の説話　345頁）、柳田国男氏（「口承文芸史考」所収「昔話と伝説と神話」）、益田勝実氏（岩波講座日本文学史「古代説話文学」3頁）等の諸説がある。

4　説話の文学性に言及した論文には五十嵐力氏「平安朝文学史」（東京堂）下巻　477頁、岡一男氏「小説史より見たる今昔物語集」（古典研究　昭和十五年七月）、芥川龍之介氏「今昔物語鑑賞」（新潮社「日本文学講座」）、生島遼一氏「日本の小説」（新潮社）所収「今昔物語と堤中納言物語」、長野嘗一氏「今昔物語評論」、益田勝実氏「説話文学と絵巻（「説話文学の方法」㈠196頁）、西尾光一氏「中世説話文学論」（第一篇「説話的発想の文学」34頁）、小島政二郎氏「わが古典鑑賞」（筑摩叢書「今昔物語」185頁）、小林保治「宇治拾遺物語序説」㈠～㈢（古典遺産9～11　昭和三十六～三十七年）等がある。

二　昔物語・世の物語・雑事と説話

(1) 昔物語と説話

もとどりをゆひわげて、をかしげなる姿にて、莚をいたにしきて、すずみゐはべりて、大なる打輪をもてあふがせなどして、往来の者、上下をいはず、よびあつめ、昔物語をせさせて、我は内にそひふして、かたるにしたがひて、おほきなるさうしに書かれけり。(宇治拾遺物語　序)

右は源隆国が平等院の南泉房で往来の者や上下の者を呼び集めて昔物語をさせ、語るに従って草子に書かせたという、宇治大納言物語成立の由来を伝えている。宇治大納言物語は現存しないが、今日いろいろの文献にとられている宇治大納言物語の断片と思われる話を集めると仏教説話、歌説話、貴族の逸話が主なものなので、今昔物語集本朝部、或は宇治拾遺物語に近い話を集めていたようである。そうすると、昔物語の中にはこれらの説話が含まれていたと考えてよさそうである。宇治拾遺物語序には右に続いて「天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり。それがうちに、貴き事もあり、をかしき事もあり、おそろしき事もあり、哀なる事もあり、きたなき事もあり、少々は、空物語もあり、利口なる事もあり、様々やうやうなり。」と記している。

今日、神話・伝説・昔話・世間話等、伝えられ、記された話を「説話」と呼んでいるが、平安・鎌倉時代の人々は何と呼んでいたであろうか。説話、あるいはこれに代わる特定の用語を見出すことはできない—ただし中国の文献には「説話」の語が見られる—が、様々の語の中に今日使われている「説話」が含まれていたようである。右の「昔物語」の中には明らかに説話が入っていたと見てよい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com